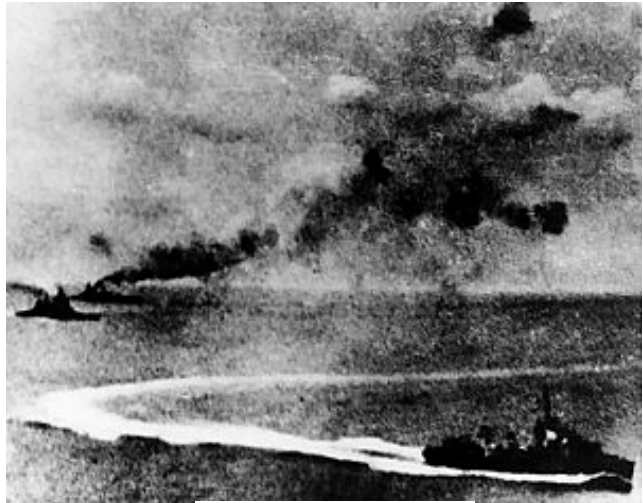


コラム 69 — 大東亜戦争における日本軍の武士道精神

<マレー沖海戦における日本海軍航空隊>

1941(昭和16)年12月10日、マレー半島東方沖で、日本海軍の航空部隊とイギリス海軍の東洋艦隊との間でマレー沖海戦(写真)が生じます。イギリス東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズは巡洋戦艦レパルスを伴い、駆逐艦3隻を従えてマレー沖で日本軍機に捕捉されます。海軍航空隊の第6次攻撃でレパルスが沈み、プリンス・オブ・ウェールズも沈没に瀕したと見るや、第7次、第8次攻撃隊はこれに止めを刺さず、残存の駆逐艦3隻を見逃して、溺者救助に当たらせました。



マレー沖海戦

そして、爆弾は域外に棄て、旋回して帰還し、翌日はその海域に慰霊の花束2つを投じています。1つは戦死した

日本軍人の霊のためであり、もう1つは戦いに敗れた英国軍人の霊に対してでした。2艦の戦死者は840人、救助されたものが2081人でありました。英国駆逐艦の艦長は、「我々は攻撃を受けなかった。救助の妨害も受けなかった。敵の攻撃機は戦艦の上を航過しなかった」と証言しました。この日本軍の気高い行動を評して、ピューリツァ賞作家ジョン・トーランドは、「日本軍は情けをかけるのはよいが、その連中は明日にも命を狙ってくることを忘れてはならない」と警告しているほどです。

一方、戦時艦船喪失史の著者である池川信次郎氏の体験では、船団の南海丸で被雷したとき、駆逐艦「敷波」が救助のため接近したところを、米潜水艦に狙い撃ちにされ、轟沈されました。また、米軍の潜水艦は相手が民間人の乗っている船と知っていて撃沈したばかりか、救助するどころかわざわざ海面を銃撃して、生き残さないよう念を入れました。さらに、海面を漂う白衣の看護婦までもが機銃掃射を受けるような、米英軍の残酷な徹底した戦いぶりも行われました。ソ連の潜水艦にいたっては、終戦後の8月21日、樺太の大泊港から本土へ帰還する婦女子を主とする、一般人多数を載せた第2新興丸、泰東丸、小笠原丸が、留萌沖で相次いで沈められ、1700人以上が本土の目前で殺されました。このように、米英軍の行為は明らかに戦時国際法違反であり、戦後のソ連の行動については、民間の船を皆殺しにするという凶悪犯罪そのものであります。

工藤艦長は、魚雷用のクレーンでも、救助できるものは全て使うように指示しました。フォール卿は、「私は奇跡が起こったのではないかと思い、本当は夢ではないかと自分を何度もつねった」と述べています。こうして、422名のイギリス将兵は救助されたのであります。終戦後、フォール卿はイギリスの外交官となっていました。定年退職した後、1996（平成8）年に「マイ・ラッキー・ライフ」という自伝を書き上げ、その巻頭に「この本を私の人生に 幸運を与えてくれた私の家族、そして私を救ってくれた元日本帝国海軍中佐工藤俊作に捧げる」と記載しました。フォール卿は、工藤艦長の精神に深く感謝するとともに、日本の武士道に深い感銘を受け、恵氏に次のように語ったといえます。「日本の武士道とは、勝者はおごることなく敗者をいたわり、その健闘をたたえることであると思います」

1998年、天皇陛下がイギリスを訪問する際、イギリスでは天皇陛下のイギリス訪問に対する反対運動が激化していました。その運動は当時、日本軍の捕虜になっていた軍人たちが関与しており、そのときの強い恨みを持ち続けていたのです。フォール卿は、このとき1997年4月29日付の「英ロンドンタイムズ」に、「雷」に救助された元英国海軍士官が、命の恩人である工藤俊作艦長を紹介しながら、「友軍以上の厚遇を受けた」という体験談を掲載しました。この投書により、これ以降の反対運動はいずれも下火になったそうです。

2003（平成15）年10月、84歳になったフォール卿は、悲願となっていた来日を果します。戦後彼は、工藤艦長の消息を探し続けており、感謝の意を述べたかったです。しかし、1979（昭和54）年、工藤艦長は享年77歳で病死していました。フォール卿は、このことを1987（昭和62）年に知りました。それでも「人生の締めくくり」として、工藤艦長の墓参をしたいと強く願っておりました。しかし、来日しても、工藤の墓も遺族の所在さえも分からず、その思いは果されませんでした。工藤は、戦後、自分のことを一切語らなかつたそうです。

フォール卿は、日本を去るとき、「敵兵を救助せよ 一英国兵422名を救助した駆逐艦「雷」工藤艦長」の著者である恵隆之介氏に調査を依頼し、恵氏の地道で懸命な調査の末、ついに遺族を見つけ出し、その墓の所在をつかみます。戦後、英国政府外交官として活躍したサムエル・フォール卿は、2008年10月（当時、卿89歳）に来日し、日本人有志と共に、工藤艦長の墓前で顕彰祭を挙行了しました。